



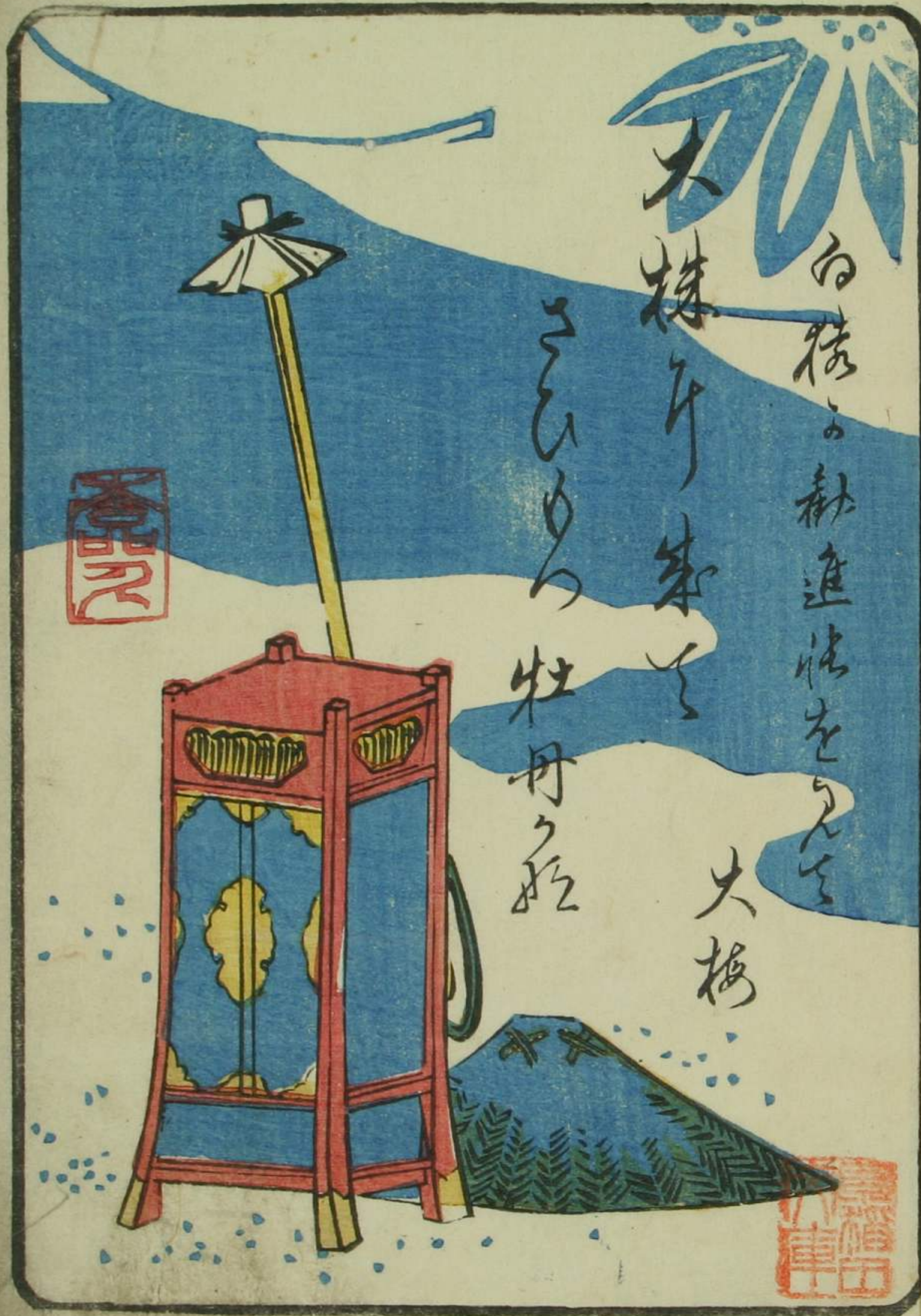
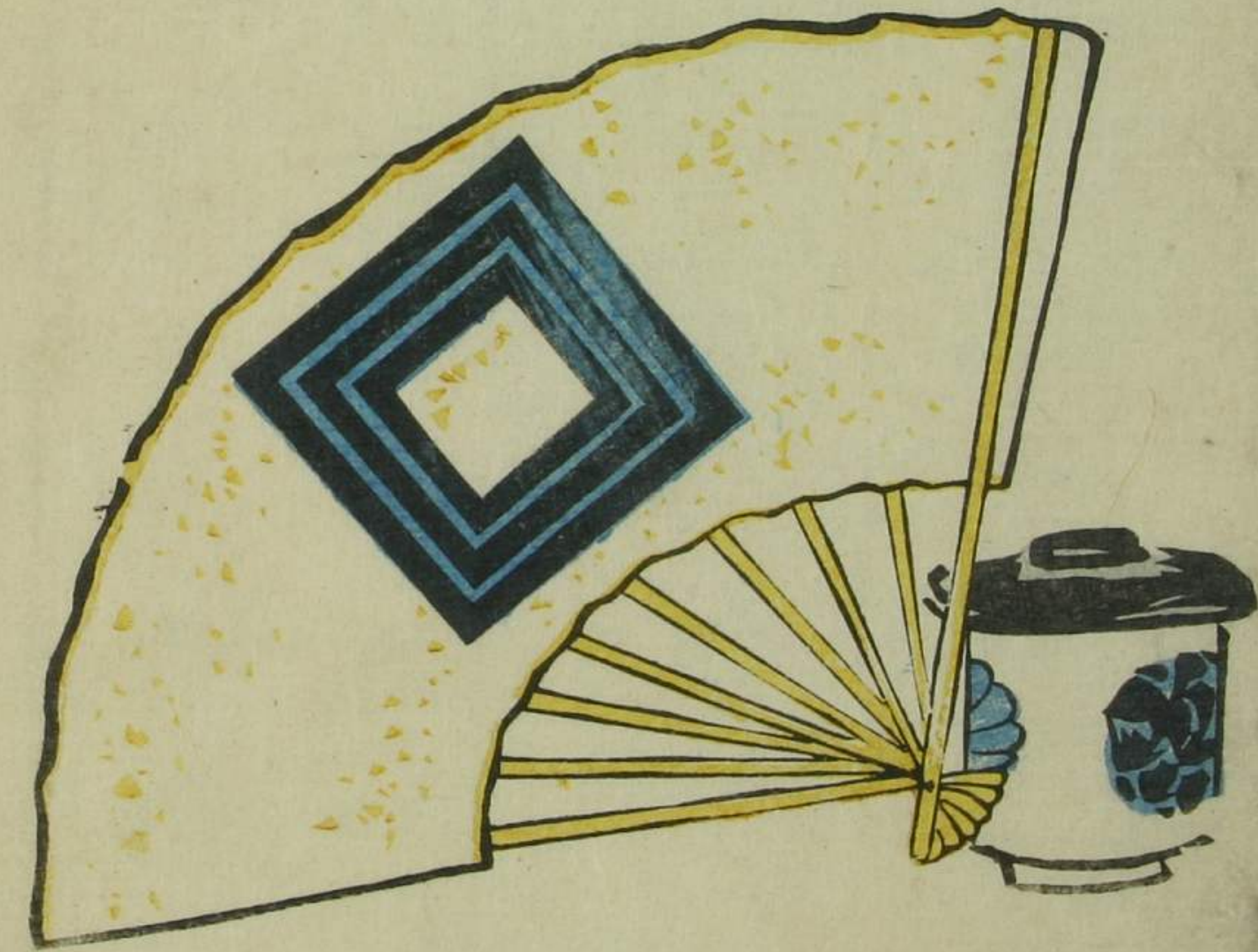
413
3792

手13
3792

特

48

白梅
牡丹
紅梅
紫梅
黄梅
綠梅
藍梅
赤梅
白梅
牡丹
紅梅
紫梅
黄梅
綠梅
藍梅
赤梅



白梅
牡丹
紅梅
紫梅
黄梅
綠梅
藍梅
赤梅

牡丹
紅梅
紫梅
黄梅
綠梅
藍梅
赤梅

梅

梅



名古屋

山三

曲五團丸



不破

伴左

衛門



油屋
お染



丁雅
久松

曲五園丸



東三郎

権太



梶原
平三景時





豊多國五



左金吾
頼兼

三浦の
高尾





高尾

高尾

高尾 高尾 高尾 高尾

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect, filling the right page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect, filling the left page.

河津路佛

Handwritten text starting with a circled character, possibly a section header or a specific note.

Handwritten text at the bottom of the left page.

市川流

士亭

歌舞妓
十八番

暫ちかしく

象引さやひき

蛇柳まづら

解脫げだつ

押戾おしり

鑷けり

鳴神なるかみ

録髭ろくひげ

景清けいせい

七面ななめん

助六すけむす

矢根やのね

不動ふどう

関羽せきぶ

嫪らう

外郎がいろう

不破ふた

勸進帳くんしんちやう

藤村直方

甲山布衣

八幡やまどの、志んぎの調しらべ今いまあぢめぬ老おいの天あまけいめんくの
上あまつ方かたがませりべの一品いっぴんの志したあつふも物もの中ちゆうをさうり
う縁ゆかり今いま目め録ろくむむじのふもしじが宮みやのあぢくへるくままい
かまことらけは一通いっとうひのやくの通とほり張はりの宮みやをひそふぬ
はまのいしこれよとあるたのその文辭ぶんじ名なあてつこれたるはれ
どもひのせうへるの粒つぶとたぐよるい貞任せいじん宗任そうじん足身あしみのやうの
うまひのいしこの目めらうがまをあつむる粒つぶみせんまる

おのこま命さまあはれけしけれとてつたが世のこま
あやしくヤモ申くかんきんごららさんごららの毒
と毒のこ毒あまはれはるんのもんあやうまじやんかひの
げいしめいいためんまのその道つたれらうと申うま
いりさんごららとてくれよめり

いそ部羽衣

中村福助

ハッ何國の権りあふねどもお世の怨怒めつせびつてる
月ひせれた菊本あかるひじうのていしおびるそれお引く

某ハ侍の個騒波のきつておてお死ませ〜父光宗が條
舞のりうあや何乗〜とてらとえりめとてひ〜とてあう
あや〜ひ星のたふゆ〜ゆいたものん〜もあれたあうらの青月
の源本は具負の悪ふさうらびとてあや物中舞は圓をたひも
あや〜とて今〜とてせあ〜舞人の教書とてまを傳三時うけ
めぐる飛科小況を縁の美こ〜あまげを〜ひけ回向あせ
是の富世のいんあ〜あまお〜い〜あう〜

八條麻衣

浅尾美山

いづれぞけのばをあらうらうらう

武能坊弁慶

富樫の瑣史

市川海老蔵
市川團十郎

■ 支修験の法といつたを台座令別のあるを旨とす
陰山系系を常世の害をなす悪敷あく鐘を造
治して現世悪民の急懸をこぼるるに難行苦行の
功をつとむるに魂を焚焼し税とせ日月法明天下を
平の行禱をあらうらうらう

徳をあらうらうらうの相をあらうらうらう
乃を感徳せり是神佛のあらうらうらう
仏道の利益をあらうらうらう
まどひ仏教の形ふあらうらうらう
■ まあらうらう焼中藤掛の武士の甲冑をあらうらうらう
あつたの利剣を帯りてあらうらうらう
大地をあらうらうらうらう
● 寺僧の縁をあらうらうらう

五鉢をくさむらひの事とあると■事由あるを令別杖の
文並檀持山の神人所羅く仙人ののちく靈杖にて
台鏡金剛の功とくをとり轉号の事とて瞿曇とん
海縁とやせし時阿羅く仙小拾はして苦行志の
や功つりり人々を修力法勢をかんく瞿曇海縁
をめぐりて照る方比丘と名付しり●ミテまの修
験小修りしり■阿羅く仙より照る小修くる令別
杖も靈杖あるべ我祖役の行者これをのりし

山杖より阿羅く一より世々小是を修り●仏門
みあつあつ草せしち刀の只おとせん料なるや
まのや小富せん料なるや■是れ世々小子のり小
ひくくか●小佩の料なるは仏法世役の事とな
る事修めくさやりさるふ及むもせしり人あるれば
かし世々しんむらびに法王法に修する事修り一殺
まののりふようくたらまらぬ修するあり●月を
しんむらびの形あるものなるむらびの事修り●修形の修る

陽曆弘法王法小傳紀多々何をのつて切あるあ
 ■重形の後老陽重入の字まらえをのつて切出せん
 小何の終と事わあらん・ニテ山依のまらえ・
 身と不動明王の字容ふかざらあり・
 中へいふ■そぞ五智の宝冠みくた一周縁のひび致
 とくく・毛をいづくく・かける裳衣の■
 のうまの藤樹・
 色のまらえと終ぞ・
 九念の事

蓮花を端のらあり・出入息の所傳の二字・
 字のまらえのらあり・
 ■九念の事
 毛のまらえ
 を傳る徳兵國者皆陣列在前の九字あり
 毛のまらえ
 持をのつて先四指を画し後小五指を
 律令と呪する時あり

惠摩外乃此靈生冥多系ふらがるる衆不執り湯
をそ〜〜ぐ〜〜
耶が親も何ぞあるんまにめつて咒をいへば故ふ
猪る〜〜
がひあ〜〜
あり好ふあり〜
徳徳仏菩薩さつも照らんあは百拜けりま由忍そ
おそれ〜〜と〜
形の通り

